

学科・専攻名

外国語準学科

教育課程・学習成果の検証

1. 学科・専攻の「開講科目数（必修・選択必修・その他）」「非常勤講師比率」「学生の入学から卒業までの平均受講科目数」等のデータを参考に、学生の受講科目数に対して開講科目数は適切か、非常勤講師比率は適切か、学生にとって体系的な科目編成となっているか等を検証

【検証結果（全体概要）】

言語コミュニケーション科目の開講科目数とコマ数は、2018年度と2021年度との比較データによると、2018年度からは増えていない。一クラス40名を超えるクラス、抽選で受講できない学生がいるクラスがあることを考えると、理想としてはクラス数をさらに増加し、語学に適切なクラスサイズを設定し、希望者全員が受講できるようにすることが望ましい。また非常勤講師率は、他の学科と比較し非常に高くなっている。科目によっては8割を超えるものもあり、問題と捉えている。

【成果および向上施策】

本来であれば、開講クラスを増やし抽選で受講できなくなる学生をなくすべきと考えるが、現状では教員負担からコマ数を増やすことが難しく、非常勤講師の依存率も高いため、語学のクラス定員30名を上回る一クラスで40人以上を受け入れるなどの個別の努力で凌いでいる。また、受講者が殺到し抽選となったクラスも本来の抽選人数を上回る人数を受け入れることで、極力受講できない学生を減らす努力をしている。

【課題および改善施策】

令和5年度以降の教育課程の再編成の基本方針では、開講クラス数は現状維持もしくは、新学部増設のうえクラス数の増加がないとすれば、実質はクラス減となる。しかし、語学は少人数でのきめ細やかな教育が不可欠である点を考慮すると、むしろクラス数を増加することが必要であろう。また、非常勤率が大きすぎる問題も、根本的には、専任を増やすことでしか改善できないと思われる。本学規模の大学で、言語コミュニケーションの英語の専任教員4人は、他大学と比して少ない状況である。

2. 「卒業時アンケート」「PROG（ジェネリックスキルテスト）結果」「学修行動比較調査」「進路・就職状況」「免許・資格取得状況」「休学・退学・留年数」「授業アンケート結果」等のデータを参考に、学科・専攻の教育について、効果が挙げられている点、改善すべき点を検証

【検証結果（全体概要）】

「卒業時アンケート」の「身に付いた力」の「外国語を日常的に使える」の項目が、2016年度から徐々に上がってきっていたものの、2021年度には一気に下がった。コロナ禍による授業のオンライン化が関係していると推測できる。コミュニケーションを扱うという特徴から、オンライン化が不向きな場合が多い。また非常勤率が高く、いくつもの大学を掛け持ちする非常勤にオンライン化が大きな負担となり、それが学生にも影響することを懸念している。

【成果および向上施策】

こまめに非常勤講師とも連絡を取りサポートし、オンライン授業マニュアルも作成した。

【課題および改善施策】

非常勤講師の中には、コンピューターに詳しくない者、その機材を自宅に持たない者もいた。そのため、専任のサ

ポートだけでは間に合わない部分もあった。オンラインサポートデスクの存在は大変ありがたかったが、今後は非常勤への機材や自宅 Wi-fi などへの金銭的サポートなどが課題として残る。

3. 学科・専攻として、教育の質向上・改善に向けた組織的な取り組み（FD）をおこなっているか。おこなっている場合、それはどのような内容か、どのような課題認識に基づくものか。

【検証結果（全体概要）】

非常勤講師比率が非常に高いため、非常勤講師へのFD活動にはとりわけ力を入れている。授業内容・進度・質のばらつきを抑制するため、言語ごとに年に一度、あるいは学期ごとに非常勤講師も含めた全体会議を開き、指導範囲、指導方法などを統一・確認することで、教育の質の均一化を図っている。

中国語と韓国語では毎週、進度記録を作成して、クラスごとの進捗を揃え、指導上のアイデアを共有、さらには会話クラスと文法クラスでペアを組んでいる教員間で学生に関する情報が共有できる仕組みを工夫すると共に、本学学生に特化した教科書を作成・使用している。ドイツ語では文法クラスとコミュニケーションクラスが連携し、専任教員・非常勤講師ともにアイデアを共有することで教科書の学習事項に連続性ができるように工夫している。フランス語では文法クラスとコミュニケーションクラスで連携できるよう工夫した教科書を作成し使用して、学習効果向上に尽力している。英語はMLを作成して非常勤と常に情報を共有しており、加えて毎年、非常勤向けの指導用のマニュアルを日本語と英語で作成している。対面授業の際は、非常勤講師室には常時顔を出すようにして、授業内で何か問題が生じた際は、すぐに専任が対応できるようにしている。専任教員間では、年度・学期ごとに各言語の履修状況を白書にまとめ、学科会議で履修者数の増減について分析・意見交換を行っている。

【成果および向上施策】

特筆すべき事項なし

【課題および改善施策】

特筆すべき事項なし

4. 教員組織の編成（採用・昇任等）にあたって、職位構成および年齢構成のバランスに配慮した編成をおこなっているか。また、カリキュラムに基づく教員組織となっているか。

【検証結果（全体概要）】

教員編成は以下の通りとなっている。高齢化が進んでいる割に教授が少ない。

年齢	60代	50代	40代	30代
人数	3	4	4	0

職位	教授	准教授	講師
人数	2	7	2

【成果および向上施策】

カリキュラム構成上は問題ない。

【課題および改善施策】

外国語準学科メンバーが、今後も、言語コミュニケーション科目の教育・管理水準維持向上に十分配慮した人事となるよう注意が必要である。